

迷い子

緋月すい

さあ、状況を整理してみよう。

「わたしはだれだ？」

——わたしはわたしだ。

「ここはどこだ？」

——よく、わからない。

「どうしてここに？」

「なにがあった？」

——以下同文。

視界を染めるのは漆黒。状況についていけない頭の中は、もやもやもやもや、ミルクのように白く濃い霧におおわれている。そんな感じ。

家を出た。そこは覚えている。その前後が問題だ。

家を出たときの自分。何か急いでいた気がする。

なぜ、なぜ、なぜ。

「落ち着いた？」

背後から、声。視界が暗いのは誰かの手がわたしの目をおおっているためだと、今さらながら気づいた。耳慣れた声。

「行っておいで」

目隠しが外される。視界に飛び込んできた門札に心臓

がはねた。

「たった一言でいいんだよ」

頭の中の霧が晴れてきた。見上げるとお母さん。

そうだ、わたしはここまできて泣き出してしまったんだ。お母さんに一緒に来てもらったのに。

門札のわきにある呼び鈴に手を伸ばす。少し震えている、わたしの手。

ピンポー……ン

電子的な音がわたしの頭の中に響く。

少しの間をおいて開けられた扉からこちらをうかがう

瞳。

初めてあの子と大きなケンカをしてしまった。今まで

にないくらいひどい言葉をお互にぶつけ合って、そのまま別れてしまった。わたしは家に帰って泣いていた。仲直りする

自信がなかったから。

お母さんを見上げると、笑顔でそつとうなずいた。

許してくれるかな。

扉のすき間の瞳と視線を交差させる。ああ、あの子の

瞳も濡れている。

ピンポー……ン

もう一度呼び鈴を鳴らすと、今度は完全に扉が開かれた。

小さな門扉を押し開け、私はあの子のもとへと駆け出した。ここ一番のダッシュ。

「ごめんね」

「ごめんね」

互いに互いの手を握って、どちらからともなく言った。

キーワード

「目隠し。ピンポン。ダッシュ。」「霧がでていた」